

東日本大震災 視覚障害被災者
支援ネットワーク インタッチ
活動報告書

インタッチ・レポート

共歩共生の情報支援



社会福祉法人 視覚障害者文化振興協会
JBS 日本福祉放送

目次

はじめに ―情報支援にシフト―	1
東日本大震災 被害状況	2
ご支援・ご協力くださった方々	3
「インタッチ」の活動	8
支援隊の活動① 被災状況調査・被災地支援活動	11
第1回 平成23年3月20日～23日（初動）	11
第2回 平成23年4月5日～9日	15
支援隊の活動② ラジオを通じた長期「情報支援」活動	21
第3回 平成23年5月17日～19日	23
第4回 平成23年9月27日～29日	25
支援隊の活動③ 「情報支援」のかなめ 音訳ボランティア育成	26
第5回 平成23年10月27日～31日	28
第6回 平成23年12月10日～12日	31
第7回 平成24年2月24日～26日	32
「インタッチ」一年の歩み	34
メディア情報	35
おわりに ―語り続けたい―	36

はじめに —情報支援にシフト—



3.11の発災から翌2012年3月までおよそ1年間、岩手県沿岸部において視覚障害被災者を対象に支援活動を行ってまいりました。そのあらましをご報告いたします。残念なことは、福島・原発について一言も語れないことです。やるせなさや無力感を覚えます。また、視覚障害被災者の状況を完全に把握することも、今なお困難な状態です。

阪神大震災では、「ハビー」という組織を立ち上げ、1,200人のボランティアと共に、3週間で1,686人の視覚障害者の安否を確認し、1,800人を対象に支援活動を1年8ヶ月間実施しました。

東日本大震災は、私たちの考えや力を大きく超えていて、容易には人間を寄せ付けられない凄みがありました。発災から10日後の21日、私たちは秋田を経由して岩手県宮古市の沿岸部によく辿り着きました。町があったであろう所は津波で壊滅しており、瓦礫の海に変貌していました。

言葉を失い、福島原発の状況を気にしながら、無力感に覆われました。阪神大震災の支援活動の手法は役立たない、安否確認も容易ではない、そう実感させられました。

何をすべきか？ 何が出来るか？ 悩んだ末に、活動場所は岩手県に限定し、内容は「情報支援」にシフトしよう、と決めました。

爾来、安否確認や支援活動のかたわら、岩手県のラジオ局や社会福祉協議会、ボランティアグループの皆さんと相談しながら「情報支援」を軸とする支援活動を出来る範囲内で展開してまいりました。視覚障害者の障害の本質は、情報障害です。長期に、継続的に、視覚障害者を情報で支援する目のかわりの仕組みが必要なのです。

このレポートが阪神大震災も含めて東日本大震災を風化させない一助となりますことを念じつつ、インタッチ=JBSを支えてくださった皆さまに感謝しながら、ここにお届けいたします。

インタッチ代表 川越 利信